

甲南女子大学図書館蔵『詞花和歌集』

紹介と翻刻（下）

米田 明 美

はじめに

甲南女子大学図書館には、室町時代中期から後期頃に書写された『詞花和歌集』（以下『詞花集』と略す）を所蔵している。『詞花集』の伝本は数多く、その中でも最も古いのは、鎌倉前期書写の伝為氏本（天理図書館蔵 重要文化財）（注1）である。本学所蔵本はその伝為氏本や新大系本（底本 国立歴史民俗博物館伝為忠筆本―旧高松宮家蔵 南北朝書写）（注2）と歌順や歌数が異なっており、これまでその内容等について、詳細な研究分析が行われてこなかったため、ここに翻刻とともに紹介したい。前半232歌（巻七 恋下）まではすでに前号（注3）に記載しているので、ここではそれ以降の翻刻を記す。

（注1）井上宗雄『詞花和歌集』解題（天理善本叢書69）一九八四年

（注2）新日本古典文学大系9『金葉和歌集』川村晃生・柏木由夫・工藤重矩校注 一九八九年（四版 二〇〇二年）岩波書店 尚『詞花和歌集』の解題は、工藤重矩が担当

（注3）『甲南女子大学研究紀要1 第59号』二〇一三年三月発行

本歌集は、縦一六・五糎、横一二・七糎の列帖装で、墨付き七〇丁の一冊。八〇行書き。和歌は一行書きで、歌数総数四一首。料紙は鳥の子である。表紙には、茶色地に金銀泥で草花を描き、裏表紙は萩と鹿を描く。外題は龍形文様の題簽で、左上に「詞華和歌集」と墨書き。

見返しは表裏とも菊花紋金箔型押出しで、現在も金の色は鮮やかである。奥書の記載はない。

極札は付されていないが、本歌集の説明を記した書付け一葉（明治廿七年六月六日の日付と「貞正」という署名）を有し、左端に彦根井伊家に伝来したとする記述がある。桐箱入り。

歌数が少なく、他の八代集に比べそれ程評価が高くない『詞花集』をこれだけ美装に仕立てているのは、同じ表装で仕立てられた他の勅撰集（八代集）があり、揃い本中の一冊であった可能性はあるが、残念ながら今のところ他の本は見出せていない。

本稿の内容であるが、

一、『詞花集』成立過程

二、本学所蔵『詞花集』の特徴

三、翻刻 卷一―七まで

以上本稿（上） 前号記載済み。

今回は、

四、翻刻 卷八―一〇

五、新大系との異同表

六、書付け一葉の翻刻

以上を掲載したい。

四、翻刻 卷八―一〇

三八ウ

詞花和歌集卷第八

恋下

人しつまりてこといひたる女のもとへまちか

ねてとくまかりたりければかくやはいひつる

とて出あはすはへりければいひ入侍りける

藤原相如

233 君をわかおもふ心はおほはらいつしかとのみすみやかれつゝ、

たいしらす

藤原道経

234 我恋はあひそめてこそまさりけれしかまのかちの色ならねとも

女のもとよりあか月にかへりてたちかへりい

三九オ

ひつかはしける

清原元輔

235 夜をふかみかへりし空もなかりしをいつくよりをく露にぬれけん

左京大夫顕輔か家に歌合し侍けるによめる

藤原顕広

236 心をはとゝめてこそはかへりつれあやしやなにの暮を待らん

女のもとより夜ふかくかへりて朝にいひつかは

しける

藤原実方朝臣

237 竹の葉に玉ぬく露にあらねともまたよをこめておきにける哉

なか月の晦・日のあしたにはしめたる女の

もとよりかへりてたちかへりつかはしける

三九ウ

三九ウ

読人しらす

238 みな人のおしむ日なれと我はたゝおそく暮行なけきをそする

《新大系本にある239 歌詞書詠者名ともになし》

藤原保昌朝臣にくして丹後国へまかり

けるにしのひて物いひけるおとこのもとへいひつ

かはしける

和泉式部

240 我のみや思ひおこせむあちきなく人は行末もしらし物ゆへ

しのひ侍ける女のもとへいひつかはしける

大江為基

241 おもふことなくて過ぬる世中につるに心をとゝめつる哉

よかれせすまうてきける男の秋立ける日

四〇オ

その夜しもまうてこさりければあしたにいひ

つかはしける

一宮紀伊

242 つねよりも露けかりつる今夜かなこれや秋立はしめなるらん

女のもとにまかりたりけるにおやのいさむれ

はいまはゑなむなんあふましきといはせて侍り

ければよめる

坂上明兼

243 せきとむる岩まの水ものをのつから下にはかよふ物とこそきけ

題しらす

恵慶法師

244 あふことはまはらにあめるいやすたれいよゝ我をわひさするかな

等恋兩人といふことをよめる

四〇ウ

右大臣

245 いつくをもよかるゝことのわりなきにふたつに分る我身ともかな

おとこにわすられてなけきける比八月はかりに

まへなる前栽のつゆをよもすからなかめ

てよめる

赤染衛門

246 もろともにおきぬる露のなかりせはたれとか秋のよをあかさまし

たいしらす

曾祢好忠

247 きたりともぬるまもあらし夏のよの有明の月もかたふきにけり

新院位におはしましける時雖契不来恋

といふことをよませ給けるにのみ侍ける

四一才

関白前太政大臣

248 こぬ人をうらみもはてし契をきしそのことの葉になさけならずや

題しらす

和泉式部

249 夕暮に物おもふ事はまさるかとわれならさらむ人にとは、や

月のあかゝりけるよまうてきたりけるおとこの

たちなからかへりにければあしたにいひつかは

しける

250 涙さへ出にしかたをなかめつゝ心にあらぬ月をみしかな

たいしらす

よみひとしらす

251 つらしとて我さへ人を忘なはざりとて中のたえやはつへき

四一ウ

平公誠

252 逢ことや涙の玉のをなるらむしはしたゆれはおちてみたるゝ

弟子なりける童のおやにくして人のくにへ

あからさまにまかりたりけるかひさしくみえさり

ければたよりにつけていひつかはしける

最厳法師

253 みかりのゝしはしの恋はさもあらはあれそりはてぬるかやかたおのたか

たのめたるおとこをいまやゝと待けるにまへ

の竹の葉にあられのふりかゝりけるをきゝ

てよめる

和泉式部

四二才

254 竹の葉にあられふるなりさらゝにひとりはぬへき心ちこそせね

程なくたえにけるおとこのもとへいひつかはし

ける

相模

255 ありふるもくるしかりけりなからへぬ人の心を命ともかな

かよひける女のこと人に物言ときゝていひつ

かはしける

清原元輔

256 うきなからさすかに物のかなしきは今はかきりとおもふ成けり

久しく音せぬおとこにつかはしける

俊子内親王大進

257 とはぬまをうらむらさきにさく藤の何とて松にかゝりそめけん

四二ウ

男の絶ゝに成けるころいかゝとゝひたる人の

かへり事によめる

高階章行朝臣女

258 思ひやれかけひの水のたえゝに成ゆくほと心のほそさを

いとをしく思侍けるわらはの大僧正行尊

かもとへまかりにければいひつかはしける

律師仁祐

259 鶯は木つたふ花の枝にても谷のふるすを思ひわたるな

返事わらはにかはりて

大僧正行尊

260 うくひすは花のみやこも旅なれば谷のふるすを忘れやはする

四三才

左衛門督家成なか月のつこもり比にはしめて

いひそめていかなる事かありけん絶てをと

つれ侍らさりけるかその冬ころきくことの

あれははゝかりてゑなんいはぬといはせては

へりける返事によめる

皇嘉門院出雲

261 夜をかさね霜とゝもにしおきぬれはありしはかりの夢をたにみす

家に歌合し侍けるにあひてあはぬ恋といふ

ことをよめる

中納言国信

262 逢事もわか心よりありしかは恋はしぬとも人はうらみし

四三ウ

263 くみてし心ひとつをしるへにて野中のし水忘れやはする

藤原仲実朝臣

関白前太政大臣の家にてよめる

関白前太政大臣の家にてよめる

藤原基俊

264 あさちふに今朝をく露のさむけくに枯にし人のなそや恋しき

こゝろかはりたるおとこにいひつかはしける

清少納言

265 わすらるゝ身はことほりとしりながら思ひあへぬは涙なりけり

ひさしく音せぬおとこにつかはしける

読人しらす

四四才

266 今よりはとへともいはし我そた、人をわする、ことをしるへき

中納言通俊たえ侍にけれはいひつかはしける よみ人しらす

267 さりとてはたれにかいはん今はた、人をわする、心をしへよ

返し 中納言通俊

268 またしらぬ事をはいかておしふへき人を忘る、身にしあらねは

おなしところなるおとこのかきたえにけれはよめる 和泉式部

269 いくかへりつらしと人をみくまの、うらめしなから恋しかるらん

大江公資にわすられてよめる

四四ウ

相模

270 夕暮はまたれし物を今はた、ゆくらむかたを思ひこそやれ

題しらす よみひとしらす

271 わする、人めはかりをなけきにて恋しきことのなからましかは

(五行分空白)

四五才

詞花和歌集卷第九

雑上

所／＼の名を四季によせて人／＼歌よみ侍

けるにみしまえの春の心をよめる 源頼家朝臣

272 春霞かすめるかたやつこの国のほのみしま江のわたりなるらん

堀川院御時うへのをのこともを御前にめして

歌よませさせ給けるによめる 源俊頼朝臣

273 すまのうらにやくしほかまの煙こそ春にしられぬかすみ成けれ

四五ウ

おなし御時百首歌たてまつりけるによめる

274 波たてる松のしつえをくもてにて霞わたれるあまのはしたて

播磨守に侍ける時三月はかりに舟よりのほり

侍けるに津国にやま地といふ所に参議為通

朝臣しほゆあみて侍とき、つかはしける 平忠盛朝臣

275 なかあすな都の花もさきぬらん我もなにゆへいそくつなてそ

修行しありかせ給ひけるにさくらの花のさき

たりけるしたにやすませ給てよませ給ける

四六才

花山院御製

276 木のもとをすみかとすれはをのつから花みる人に成ぬへきかな

人のもとにまかりたりけるに桜花おもしろ

くさきて侍けれはあしたにあるしのもとへ

いひつかはしける

天台座主源心

277 ちらぬまにいま一たひもみてしかな花にさきたつみともこそなれ

花をおしむ心をよめる

大藏卿匡房

278 春くれはあちかた、のみひとかたにうくてふいをのなこそをしけれ

宇治前太政大臣花見にまかりにけるとき、て

四六ウ

つかはしける 堀川右大臣

279 身をしらて人をうらむる心こそちる花よりもはかなかりけれ

二条関白しら河へ花みになんといはせ侍け

れはよめる

小式部内侍

280 春のこぬところはなきをしら川のわたりにのみや花はさくらん

入道撰政やへ山吹をつかはしていか、みるとい

はせて侍けれはよめる

大納言道綱母

281 たれかこのかすはさためし我はた、とへと思ふ山ふきのはな

新院位におはしまし、時后宮御かたにかんた

四七才

ちめうへのをのこともめして藤花年久と

いふことをよませさせ給けるによめる

大納言師頼

282 かすか山のきたの藤なみさきしよりさかゆへしとはかねてしりにき

修理大夫顕季みまさかのかみに侍けるとき

人／＼いさなひて右近のむまはにまかりて

郭公まち侍けるに俊子内親王の女房二車

まうてきて連歌し歌よみなとしてあけ

ほのかへり侍けるにかの女車より

283 みまさかやくめのさらやまと思へとも和歌のうらとそいふへかりける

四七ウ

この返事せよといひ侍ければよめる

贈左大臣

284 和歌のうらといふにてしりぬ風ふかは波のよりこと思ふなるへし

左衛門督家成ぬの引のたきみにまかりて

歌よみ侍けるによめる

藤原隆季朝臣

285 雲よりつらぬきかくるしら玉をたれぬの引のたきといふらん

新院位におはしまし、時御前にて水草

隔船といふことをよみ侍りける

大蔵卿行宗

四八オ

286 難波えのしけきあしまをこく舟は棹のをとにそゆく方をする

題しらす

律師済慶

287 おもひ出もなくてや我身やみなましおはすて山の月みさりせは

ち、永実信濃守にてくたり侍けるとともにま

かりてのほりたりける比左京大夫顕輔家

に歌合し侍けるによめる

藤原為真

288 なにたかきおはすて山もみしかとも今夜はかりの月はなかりき

月のあかく侍ける夜人、まうてきてあそひ

侍けるに月入にければ興つきてをのゝ

四八ウ

かへりなむとしければよめる

大中臣能宣朝臣

289 月は入ひとはいてなはとまりゐてひとりや我は空をなかめん

おほんくしおろさせ給て後六条院の池に

月のうつり侍けるを御覧してよませ給ける

小一条院御製

290 池水にやとれる月はそれなからなむる人の影そかはれる

左京大夫顕輔中宮亮にて侍ける時下

らうにこえらるへしとき、て宮の女房のなかに

なけき申したりける返事にたれとはなくて

四九オ

291 世の中をおもひないりそみかさ山さし出る月のすまむかきりは

田家月といふことをよませ給ける

新院御製

292 月きよみたなかにたてるかり庵の影はかりこそくもり成けれ

新院位におはしましし時月のあかく侍り

ける夜女房につけてたてまつらせ給ける

太政大臣

293 すみのほる月の光にさそはれて雲の上までゆく心哉

あれたるやとに月のもりて侍けるを

よめる

良暹法師

四九ウ

294 板間より月のもるをもみつるかなやとはあらして住へかりけり

題しらす

内大臣

295 雲もなくしのたのもりのしたはれて千枝のかすさへみゆる月かけ

山家月をよめる

源道済

296 さひしさにいへてしぬへき山さとをこよひの月に思ひとまりぬ

新院殿上にて海路月といふ事をよめる

平忠盛朝臣

297 ゆく人もあまのとわたる心ちして雲のなみに月をみる哉

題しらす

橘為義朝臣

五〇オ

298 君まつと山のはいて、やまのはに入まて月をなかめつるかな

堀河院御時中宮御方にまいりて女房

に物申けるほとに月の山のはよりたちのほり

けるをみて女の月はまつにかならずいつ

るなんあはれなるといひければよめる

大納言公実

299 いかなれは待には出る月なれと入を心にまかせさるらん

たいしらす

花山院御製

300 こゝろみにほかの月をもみてしかなわか宿からのあはれなるかと

月のあかく侍ける夜前大納言公任まうてき

五〇ウ

たりけるをする事侍ておそくいてあひけ

れはまちかねてかへり侍にければつかはしける 中務卿具平親王

301うらめしくかへりける哉月夜にはこぬ人をたに待とこそきけ

屏風のゑに山の峯にゐて月みたる人

かきたる所によめる

大江嘉言

302かこ山のしら雲かゝるみねにてもおなしたかさそ月はみえける

家に歌合し侍けるによめる

左京大夫顕輔

五一才

303夜もすからふしのたかねに雲きえて清見か関にすめる月かけ

山しろのかみになりてなけき侍けるころ

月のあかゝりける夜まうてきたりける人の

いかゝ思ふとゝひ侍りければよめる

藤原輔尹朝臣

304山しろのいはたの杜のいはすとも心のうちをてらせ月かけ

ひさしくおとせぬ人のもとへ月のあかき夜

いひつかはしける

中原長国

305月にこそむかしのことはおほえけれわれを忘るゝ人にみせはや

山しな寺にまかりたりけるに宋延法師

五一ウ

にあひて夜もすから物いひ侍けるにあり明の

月みかさの山よりさしのほりけるをみてよめる

琳賢法師

306なからへは思ひいてせんおもひ出よきみとみかさの山のはの月

京極前太政大臣家歌合によめる

大藏卿匡房

307逢坂の関のすきはらしたはれて月のもるにそまかせたりける

つくしよりかへりまうてきてもとすみ侍ける

所のありしにもあらずあれにけるに月のいと

あかく侍ければよめる

五二才

帥前内大臣

308つれ／＼とあれたるやとをなかわれは月はかりこそむかしなりけれ

題しらす

高松上

309ふかくいりてすまはや思ふ山のはをいかなる月の出るなるらん

たかひにつゝむ事あるおとこのたやすくあは

すとうらみければよめる

和泉式部

310をのか身のをのか心かなはぬをおもはゝ物は思ひしりなん

忍ひけるをとこのいかゝおもひけん五月五日

の朝にあけて後かへりてけふあらはれぬるなん

五二ウ

うれしきといひたりける返事によめる

311あやめ草かりにもくらむ物ゆへにねやのつまとや人のみつらん

保昌にわすれられて侍ける比兼房朝臣のと

ひ侍ければよめる

312人しれす物おもふことはならひにき花にわかれぬ春しなけれは

藤原盛房かよひける女をかれ／＼になりて

のち神無月の廿日比に時雨のしける日

なにことかといひつかはしたりければ母のかへり

事とていへりける

よみ人しらす

313おもはれぬ空のけしきをみるからに我もしくるゝ神無月かな

五三才

題しらす

待賢門院堀川

314あた人はしくるゝよはの月なれやすむとてえこそたのむましけれ

たえにけるおとこの五月はかりに思ひかけす

まうてきたりければよめる

よみ人しらす

315たかさとにかたらひかねて時鳥かへる山地のたよりなるらん

たのめたるにみえさりける男の後にまうてき

たりけるにいてあはさりければいひわひて

つらき事をしらせつるなといはせたりけれ

はよめる

五三ウ

清少納言

316 よしさらはつらさは我にならひけりたのめてこぬは誰かおしへし

かきたえたるおとこのいか、思ひけむきたり

けるか帰けるあか月に雨のいたくふりけれ

はあしたにいひつかはしける

江侍従

317 かつきけんたもとは雨にいか、せしぬる、はさても思ひしれかし

題しらす

曾祢好忠

318 ふかくしもたのまさるらん君ゆへに雪ふみ分てよなくそゆく

いたくしのひけるおとこのひさしくをとせさり

けれはいひつかはしける

五四オ

赤染衛門

319 よの人のまたしらぬまのうす氷みわかぬひとにきえねとそおもふ

いひわたりけるおとこの八月はかりにそての

露けさなといひたりける返事によめる

和泉式部

320 秋はみな思ふことなき萩の葉も末たわむまで露はをくめり

藤原隆時朝臣ものいひ侍ける女をたえに

ければ弟忠清かよひけるもほとなくわすれ

侍にければ忠清かおと、隆重にあひぬと

き、てかの女にいひつかはしける

五四ウ

藤原忠清

321 いかなれはおなしなかれの水にしもさのみは月のうつるなるらん

題しらす

相模

322 住吉のほそ江にさせるみをつくしふかきにまけぬ人はあらしな

もの思ひけるころよめる

大納言道綱母

323 ふる雨のあしともおつる涙かなこまかに物を思ひくたけは

おもふ事侍けるころゐのねられす侍ければ

よもすからなかめあかして有明の月くまなく

はへりけるかにはかにかきくらししくれけ

五五オ

るを見てよめる

赤染衛門

324 神無月あり明の空のしくる、をまた我ならぬ人やみるらん

しのひに物おもひけるころよめる

出羽弁

325 しのふるもくるしかりけり数ならぬ身には涙のなからましかは

忍ひたるおとこのなりけるきぬをかしかま

しとてをしのけ、れはよめる

和泉式部

326 音せぬはくるしき物を身にちかくなるとていとふ人もありけり

五五ウ

おもくわつらひけるにたちをくれなはえなむ

なからふましきといひたるおとこの返事

によめる

大式三位

327 人の世にふたたひしぬる物ならはしのひけりやと心みてまし

題しらす

右大弁俊雅母

328 夕霧にさの、ふなはし音すなりたなれのこまのかへりくるかも

長元八年宇治前太政大臣の家に歌合し

侍けるにかちかたのおのこともすみよしにまう

て、歌よみ侍けるによめる

式部大輔資業

五六オ

329 すみの江のなみにひたれる松よりも神のしるしそあらはれにける

物へまかりける道に人のさうふをひきける

をなかきねやあるとこはせけるをおしみ侍ければ

よめる

周防内侍

320 いかてかくねお、しむらんあやめ草うきにはこゑもたてつへきよを

冷泉院へたかむなたてまつらせ給とてよませ

給ける

花山院御製

331 世中にあるかひもなき竹のこはわかつむ年をたてまつるなり

御かへし

冷泉院御製

332 年へぬる竹のよはひをかえしても此世をなくなさむとそおもふ

五六ウ

おとこをうらみてよめる

和泉式部

333 あしかれとおもはぬ山のみねにたにおふなる物を人のなけきは

津の国にこそへといふところにこもりて前

大納言公任かもとへいひつかはしける

能因法師

334 ひたふるに山田もる身と成ぬれは我のみ人をおとろかす哉

後二条関白はかなきことにてむつかり侍けれ

は家のうちには侍なからまへ、もさし出侍ら

て女房の中にいひ入侍ける

五七オ

源仲正

335 みかさ山さすかにかくろへてふるかひもなきあめの下かな

おほやけの御かしこまりにて侍けるを僧正

深覺申ゆるして侍ければそのよろこひに

五月五日まかりてよめる

平致経

336 君ひかす成なましかはあやめ草いかなるねをかけふはかけまし

長恨歌の心をよめる

源道濟

327 思ひかねわかれし野へをきてみればあさちか原に秋風そふく

五七ウ

みちの国の任はて、のほり侍けるにたけ

くまの松のもとにてよめる

橘為仲朝臣

338 ふるさとへわれはかへりぬたけくまの松とは誰につけよとかおもふ

世にしつみて侍ける比かすかの冬の祭にへ

いたてまつりけるにおほえけることをみてくら

にかきつけ侍ける

左京大夫顕輔

339 かれはつる藤の末葉のかなしきはた、春のひを契はかりそ

帥前内大臣あかしに侍ける時こひかなし

みてやまひになりてよめる

五八オ

高内侍

340 よるのつる都のうちにこめられて子を恋つ、もなきあかす哉

堀河院御時百首歌たてまつりけるに

よめる

大納言師頼

341 身のうさは過ぬるかたを思ふにもいま行末の事そかなしき

342 むもれ木のしたはくつれといにしへの花の心は忘さりけり

大藏卿匡房

題しらす

大納言伊通

343 今はた、むかしそつねに恋らる、残ありしを思ひ出にして

小野宮右大臣のもとにまかりて昔のことなと

五八ウ

いひてよめる

清原元輔

344 老て後むかしをしのお涙こそこ、ら人めをしのはさりけれ

題しらす

賀茂政平

345 ゆく末のいにしへはかり恋しくはすくる月日もなけかさらまし

新院のおほせにて百首歌たてまつりける

藤原季通朝臣

よめる

346 いとひても猶おしまる、我身かな二たひくへき此世ならねは

神祇伯顕仲ひろたにて歌合し侍とて

寄月述懐といふことをよみてとこひて侍け

れはつかはしける

五九オ

左京大夫顕輔

347 なには江のあしまにやとる月みれは我身ひとつもしつまさりけり

(五行分字白)

五九ウ

詞花和歌集卷第十

雑下

都にすみわひてあふみにたなかみといふ所
にまかりてよめる

源俊頼朝臣

348 あし火たく山のすみかは世中をあくかれそむるかとてなりけり

女ともの沢に若菜つむをみてよめる

349 しつのめか多くつむさはのうす氷いつまでふへき我身なるらん

四位して殿上おりて侍ける比鶴鳴阜と

いふ事をよめる

藤原公重朝臣

六〇才

350 昔みし雲を恋てあしたつのさはへになくや我身なるらん

新院六条殿におはしましける時月のあかく

侍ける夜御舟にたてまつりて月前言志と

いふことをよませ給けるによめる

右近中将教長

351 三日月のまた有明に成ぬるやうき世をめくるためしなるらん

桜花のちるをみてよめる

藤原実方朝臣

352 ちる花にまたもやはあはむおほつかなその春までとしらぬ身なれば

世中さはかしくきこえける比よめる

六〇ウ

353 あさなく鹿のしからむ萩のえの末葉の露のありかたのよや

増基法師

秋の野をすきまかりけるにおはなのかせに

なひくを見てよめる

源親元

354 花すきまねかはこにとまりなんいつれの野辺もつゐのすみかそ

心ちれいならすおほされける比よみ給ける

四条中宮

355 よそにみし小花かすゑのしら露はあるかなきかの我身なりけり

世のなかはかなくおほえさせ給けるころよま

六一才

せ給ける

花山院御製

356 かくしつゝいまはとならむ時にこそくやしきことのかひもなからめ

入あひのかねのこゑをきゝてよめる

和泉式部

357 夕ぐれは物そかなしき鐘のをとをあすもきくへき身としらねは

大納言忠教みまかりにける後の春うくひすの

なくをきゝてよめる

藤原教良母

358 鶯のなくに涙のおつるかな又もや春にあはむとおもへは

はかなきことのみおほくきこえける比よめる

六一ウ

359 みな人のむかしかたりに成ゆくをいつまでよそにきかんとすらん

夏よの・はしにいてゐてすゝみ侍けるにゆふや

法橋清昭

みにいとくらく侍りければよめる

神祇伯頭仲女

360 この世に月まつほとはくるしきにあはれいかなるやみにまとはん

病おもく成侍りにける比雪のふるをみてよめる

良暹法師

361 おほつかなまたみぬ道をしての山雪ふみ分てこえんとすらん

大江拳周朝臣おもくわすらひてかきりに見え

六二才

侍りければよめる

赤染衛門

362 かはらむといひの命はおしからてさてもわかれんことそかなしき

病おもく成はへりにければ三井寺へまかりて京

の坊にうへをきて侍ける八重紅梅をいま

は花さきぬらんみはやといひければおりにつかは

してみせければよめる

大僧正行尊

363 此世には又もあふまし梅の花ちり／＼ならむことそかなしき

その、ちほとなくみまかりにけるとそ

六二ウ

人の椎をとらせて侍りければよめる

よみひとしらす

364 この身をはむなしき物としりぬれはつみゑんこともあらしとおもふ

題しらす

増基法師

365 我おもふ事のしけさにくらふれはしのたのりの千枝は数かは

366 あしろにはしつむくつもなかりけりうちのわたりに我やすまゝし
大江以言

大原にすみはしめけるころ俊頼朝臣のもと
良暹法師
へいひつかはしける

六三才

367 大原やまたすみかまもならはねはわか宿のみそけふりたえたる

賢智法師
たいしらす

368 涙河そのみなかみをたつぬれは世をうきめよりいつる成けり

太政大臣
此集撰侍とて家の集こひて侍ければよめる

369 おもひやれ心の水のあさければかきなかすへきことの葉もなし

周防内侍尼になりぬときゝていひつかはし

大蔵卿匡房
ける

370 かりそめのうき世のやみをかき分てうら山しくも出る月かな

法師になりて左京大夫顕輔か家にて帰雁

六三才

をよめる
沙弥連寂

371 かへる雁にしへ行せは玉章におもふ事をはかきつけてまし

読しらす
題しらす

372 身をすつる人はまことにすつるかはすてぬ人こそすつる成けれ

藤原実宗ひたちのすけに侍ける時大蔵省

のつかひともきひしくせめければ匡房にいひて

侍ければ遠江にきりかへて侍ければいひつかは

しける
太皇太后宮肥後

373 つくは山ふかくうれしと思ふかなはまなの橋にわたす心を

下ろうにこえられて堀川関白のもとに侍ける

六四才

人のもとへおとゝにもみせよとおほしくてつかは

しける
大中臣能宣朝臣

374 年をへてほしをいたゝくくろかみの人よりしもに成にけるかな

白川院位におはしましける時修理大夫

顕季につけてまうさする事侍けるを宣旨

の遅くたりければその冬ころいひつか

はしける
津守国基

375 雲の上は月こそさやにさゑわたれまたとゝこほる物やなになる

返し
修理大夫顕季

376 とゝこほることはなけれとすみ吉のまつ心にや久しかるらん

六四才

新院位におはしましし時うへのをのことゝも

をめして述懐の歌よませさせ給けるにしら

河院の御ことをわするゝ時なくおほえはへり

ければ
大納言成通

377 しら河のなかをたのむ心をはたれかは空にくみてしるへき

堀川院御時百首歌中によめる
大蔵卿匡房

378 もゝとせは花にやとりてすくしてきこの世はてふの夢にぞ有ける

《新体系本にある379 歌詞書詠者名ともになし》

むすめのさうしをかゝせけるおくに書つけゝける
源義国妻

六五才

380 このもとかきあつめたることの葉をはゝそのもりのかたみとはみよ

左京大夫顕輔あふみのかみに侍ける時とをき

こほりにまかりけるにたよりにつけていひつか

はしける
関白前太政大臣

381 思ひかねそなたの空をなかむればたゝ山のはにかゝるしら雲

新院位におはしましゝ時海上遠望といふ

ことをよませ給けるによめる

382 わたのはらこきいてゝみれは久かたの雲ゐにまかふ奥ゝしらなみ

後冷泉院御時大嘗会主基方御屏風に

備中国たかくら山にあまたの人花つみたる

六五ウ

かた書ける所によめる

藤原家経朝臣

383 うちむれてたかくら山につむ物はあらたなき代のとみ草のはな

今上大嘗会悠紀方御屏風にあふみのくに

いたくらの山田にいねおほくかりつめりこれ

を人見たるかたかきたる所によめる

左京大夫顕輔

384 いたくらの山田につめるいなをみておさまれる代のほとをしるかな

円融院堀河院にふたゝひ行幸せさせ給

けるによめる

曾祢好忠

六六オ

385 みなかみのさためてければ君か代にふたゝひすめるほり河の水

ありまの湯にまかりたりけるによめる

宇治前太政大臣

386 いさやまたつゝきもしらぬたかねにてまつくる人に都をそとふ

熊野へまうてけるみちにて月をみてよめる

道命法師

387 都にてなかめし月のもろともにたひの空にも出にけるかな

播磨に侍ける時月をみてよめる

帥前内大臣

388 みやこにてなかめし月をみる時はたひの空ともおほえさりけり

六六ウ

信濃守にてくたりけるにかさこしの峯にて

よめる

藤原家経朝臣

389 かさこしの峯のうへにてみる時は雲はふもとの物にそありける

藤原頼任朝臣美濃守にてくたり侍けるとも

にまかりてその後年月をへてかの国の守

になりてくたり侍とてたるゐといふいつみ

をみてよめる

藤原隆経朝臣

390 昔みしたるゐの水はかはらねとうつれる影そ年をへにける

師前内大臣はりまへまかりけるともにてかは

しりをいつる日よみ侍ける

六七オ

391 思ひいてもなきふるさとの山なれとかくれゆくはたあはれ成けり

三条太政大臣みまかりて後月をみてよめる

前大納言公任

392 いにしへをこふる涙にくらされておほろにみゆる秋のよの月

むすめにおくれてなけき侍ける人に月のあか

かりける夜のいひつかはしける

堀河右大臣

393 そのことゝ思はぬたにもある物をなに心ちして月をみるらん

あはたの右大臣みまかりにける比よめる

六七ウ

394 夢ならて又もあふへき君ならはねられぬゐをもなけかさらまし

堀川中宮かくれ給てわさのことはてゝの朝

よませ給ける

円融院御製

395 おもひかねなめしかととりへ山はてはけふりもみえす成にき

一条摂政みまかりにけるころよめる

少将義孝

396 夕まくれこしけき庭をなかめつゝ木の葉とゝもおつるなみたか

子の思ひに侍ける比人のとひて侍ければよめる

待賢門院安芸

六八オ

397 人しれす物おもふおりもありしかとこのことはかりかなしきはなし

兼盛子におくれてなけくときゝていひつかは

清原元輔

398 おひたゝてかれぬときゝしこのものいかてなけきのもりとなるらん

天曆の御門かくれおはしまして七月七日に

御忌はてゝちりゝにまかりいてけるに女房の

中にをくり侍ける

返し

399 けふよりはあまの河霧立わかれいかなる空にあはんとすらん

七夕は後のけふをも契らむ心ほそきはわか身なりけり

よみ人しらす

六八ウ

むすめにをくれてふくき侍とてよめる

神祇伯顯仲

401 あさましや君にきすへきすみ染の衣の袖をわかぬらすかな

大江匡衛みまかりて又のとしの春花をみて

よめる

赤染衛門

402 こその春ちりにし花もさきにけりあはれわかれのか、らましかは

《新体系本にある403歌詞書詠者名ともになし》

後冷泉院御時藏人にて侍けるに御門かくれ

おはししければよめる

藤原有信朝臣

404 涙のみたもにかゝる世の中に身さへくちぬることそかなしき

六九オ

おとこにおくれてよめる

よみ人しらす

405 おり／＼のつらさをなに、なけきけんやかてなき世もあれば有けり

人の四十九日の誦經文にかきつけたりける

406 人をとふかねのこゑこそあはれなれいつか我身にならむとすらん

にるまいりして侍ける女のまへゆるされて

後ほとなくみまかりにければよみ侍ける

四条中宮

407 くやしくもみなれる哉なへて世のあはれとはかりきかましものを

いなりのとりぬにかきつけ侍ける歌

六九ウ

よみひとしらす

408 かくてのみ世にあり明の月ならは雲かくしてよあまくたるかみ

おやの処分をゆへなく人におしとられけるを此

事ことはり給へと稲荷にこもりて祈申ける

法師の夢にやしろのうちよりいひいたし

給ける歌

409 なかき世のくるしきことを思へかしなになけくらんかりのやとりに

賀茂のいつきときこえける時にしにむかひて

よめる

選子内親王

410 思へともいむとていはぬ事なればそなたにむきてねをのみそなく

七〇ウ

信解品周流諸国五十余年といふことをよ

める

神祇伯顯仲

411 あくかる、身のはかなさはも、とせのなかは過てそ思ひしらる、

即身成仏といふ事をよめる

よみ人しらす

412 露の身のきえて仏になることはつとめて後そしるへかりける

舍利講のついでに願成仏道の心を人々に

よませ侍けるによみ侍ける

関白前太政大臣

413 よそになと仏の道を尋けんわか心こそしるへなりけれ

七〇オ

左京大夫顯輔

414 いかて我心の月をあらはしてやみにまとへる人をてらさん

常在靈鷲山のこゝろをよめる

登蓮法師

415 世中の人のこゝろのうき雲に空かくれするありあけの月

(三行分空白)

五、新大系本(底本 国立歴史民俗博物館伝為忠筆

本―旧高松宮家蔵)との異同表

甲南女子本

新大系本

1 詞 御とき たてまつり侍りけるに↓御うた たてまつりけるに

6 以下の歌順 6・9・7・12・13・10・14・8・11 詞書詠者歌ともに

甲南女子大本なし

12 詞 題しらす―春駒をよめる

15 詞 大臣家歌合によめる―大臣家歌合にし侍けるによめる

- 19 詞 詩に ことなしと—詩には ことなむなき
 27 歌 なかりける哉—なかりつるかな
 36 詞 かきつけ—かきつけて
 38 詞 さくら—桜花
 41 歌 ちるをり—ちるとき
 42 歌 けふやは—けふや
 45 歌 一枝—一重
 50 詞 よませせ給けるに—よませさせたまひけるに
 52 詠 俊頼朝臣—源俊頼朝臣
 53 詞 めつらしきよし—めつらしきよしを
 68 歌 かさしの—かさしは
 68 歌 あま—浦人
 77 歌 おしみもあへす—おしみもあへぬ
 81 歌 むしのねは—虫の音も
 82 詞 摂津国—津の国
 85 詞 はへりたれは—侍にければ
 85 詞 給ての後—給ての
 90 歌 たとれは—たとるも
 93 歌 かはらぬ—かへらぬ
 94 歌 秋の月—月の影
 96 詞 家にて 侍けるに—家に 侍けるによめる
 101 詠 藤原顕綱朝臣—源頼綱朝臣
 103 詞 秋の夜の こゝろそひまも—秋の夜は こゝろのひまそ
 103 詞 家にて—家に
 113 詞 侍けるを—侍ければ
 114 詞 あさかほの花—あさかほの花の
 115 歌 きる人なし—しる人なし
 116 詞 前裁合をさせ—前裁合せさせ
 116 歌 萩か枝—萩の枝
 121 詞 をはりのくに 鳴けるを—尾張の国の鳴き侍けるを
 131 詞 三川のくに—三河の国の
 133 歌 いふらん—いひけむ
 133 歌 みちも—道の
 134 詞 侍けるに秋—侍ける秋
 136 詞 あか、りけるに—明き夜
 137 詞 かけるところを—かきたるところに
 139 歌 いつかたへ—いつかたに
 148 歌 このはかくれ—木の下かけ
 151 歌 紅葉つもれる—紅葉つもれり
 153 詞 まつりける中に—まつりけるに
 154 詞 はつ雪をよめる—初雪をみてよめる
 157 歌 くれなると—くれなるに
 163 歌 千代をかそへん—千代はかそへむ
 163と164の間に 京極前太政大臣家にて歌合し侍けるに 大藏卿匡房
 164 詞 君か代はくもりのあらしみかさ山峯のあたりのさゝむかきりは
 164 詞 歌合し侍りけるに—歌合に
 165 歌 析くる—析つる
 167と168の間に 天喜四年四月晦日后宫歌合によませ給ける 後冷泉院御製
 171 詞 なかはまのまさこのかすも何ならしつさせすもゆる君かみよかな
 171 詞 俊綱にくして—俊綱朝臣にくして
 172 歌 おひかはりけん—おひかはるらん
 173 詞 いよの国のかみ くだりけるに—いよの守 くだりたるに
 173 詞 みちさたにわすられて後陸奥守—道貞わすれてのち陸奥の国の
 176 詞 守
 176 詞 くだり侍けるに—くだり侍ける
 177 詞 くだり侍けるに—くだりけるに

- 179 詞 とてよめる―とて
 182 詞 あるしにあひて―あるしに
 183 詞 陸奥守になりて―陸奥の国の守にて
 歌 行めくり―行かへり
 188 歌 ありとは―ありとも
 194 詞 よませ―よませさせ
 196 詞 家に―家にて
 197 詠 寛念法師―寛念法師
 199 詞 書詠者名歌とも甲南女子大本なし
 202 歌 あはれ思ひ―あはぬ思ひ
 205 歌 つくりなむ―つくりけむ
 206 詞 世にちりて―とし月を―世に知りて年月
 歌 ひとたひは↓ひとかたに
 207 詞 ちきり侍りける―をとつれもし侍―契りて侍ける―をとつれ侍
 208 詞 ゆるきなき―ゆるきけなき
 歌 露をもみ―露をもみ
 217 詞 返事―返し
 220 詞 返事をせさりければ―返事をせず侍ければ
 221 詞 あきすけか家にて―あきすけか家に
 223 詞 「女をうらみてよめる」新体系本ナシ
 226 歌 あふかたそなき―あふかたもなき
 231 詞 冬ころ―冬のころ
 歌 くると思ひし―くる、と思ひし
 233 詞 出あはすはへりければ―出であはさりければ
 235 詞 あか月に―あかつき
 236 詠 藤原顕広―藤原顕広朝臣
 238 詞 あしたに―あした
 239 詞 書詠者名歌とも甲南女子大本なし
 240 詞 しのひ侍りける女―物言ひ侍りける女
 241 歌 しらし物ゆへ―知らぬものゆゑ
 242 歌 過ぬる―すきつる
 246 詞 露けかりける―露けかりつる
 248 詞 なけきける比―なけきけるに
 252 詞 おはしましける時―おはしましし時
 253 歌 ことの葉に―ことの葉も
 254 詠 まさるか―まさるやと
 258 平公誠―平兼盛
 260 詞 あからさまに―あからさまとて
 261 詞 まかりたりける―まかりける
 266 詞 みえさりければ―みえ侍らさりければ
 268 詞 まへの―前なる
 269 詞 いとをしく思―いとをしく
 270 詞 返事―返し
 276 詞 はしめていひそめて―いひそめて
 279 侍らさりけるか―侍らさりければ
 283 歌 おきぬれは―おきぬれは
 285 夢をたにみす―夢たにもみす
 288 詠 よみひとしらす―詠者名ナシ
 295 詞 いかておしふへき―いか、教ふへき
 303 花みる人に―花みる人と
 308 歌 まかりにけると―まかりにけりと
 312 詞 かの女車―かの女房の車
 315 詞 返事―返し
 318 歌 波のよりこと―波のたちこと
 322 詞 いふらん―いひけん
 325 詠 藤原為真―藤原為実
 328 歌 雲もなく―くまもなく
 330 歌 月かけ―月かな

- 399 詞 かへり事とて―かへり事にて
 397 歌 五月はかりに―五月はかり
 395 詞 八月はかりに―八月はかり
 390 詞 かよひけるも―通ひ侍けるも
 385 詞 すみの江の―住吉の
 384 詞 おしみ侍ければ―おしみければ
 380 歌 たてまつりけるに―立てけるに
 379 詞 契はかりそ―たのむはかりそ
 378 歌 こめられて―はなたれて
 373 詞 こひて侍ければ―乞ひ侍ければ
 371 歌 我身ひとつも―わか身ひとつは
 363 詞 あくかれそむる―あくかれいつる
 361 詞 みまかりにける後―みまかりけるのち
 360 歌 あはむとおもへは―おはむとすらん
 358 詞 ゆふやみに―ゆふやみの
 348 詞 侍りにける―侍りける
 347 詞 三井寺へ―三井寺に
 340 詞 いひければ―いひ侍ければ
 339 詞 法師になりて―法師になりてのち
 330 詞 匡房―卿匡房
 329 歌 夢にそ有ける―夢にさりける
 321 詞 詞書詠者名歌とも甲南女子大本になし
 319 歌 あつめたる―あつめつる
 315 詞 悠紀方御屏風―悠紀方屏風
 313 詞 円融院―円融院御時
 311 詞 くだり侍とて―くだり侍て
 309 詞 ことはて、の朝―事はててあしたに
 307 歌 おもふおりも―おもふことも
 305 詞 かくれおはしまして―かくれさせおはしまして

- 400 歌 契らむ―たのむ
 403 詞 詞書詠者名歌とも甲南女子大本なし
 404 詞 おはしまして―おはしましてにければ
 406 詞 かきつけたりける―かきつけける
 407 歌 みなれける哉―見そめけるかな

六、書付け一葉の翻刻

「詞花和歌集 十卷 一本

七十二代近衛院天養元年崇徳院おりゐさせたまひて後の勅によりて左京大輔顕輔卿これを撰す天養元年十二月二日にうけたまはりて仁平年中に之総覧す御覧し後かへしたまはりて御覧より藤範保盛経等のうたを除きたまへりすなはち清輔朝臣を御使として顕輔の家に持参すと袋草子に見えたり顕輔は修理大夫顕季の子にして清輔顕眼法師などの父なり和歌一家の祖として後に六条家といへり○奉覧の本は布目の色紙の草子に顕輔か卿の自筆之は八雲御抄拾苴抄等に見えたり○詞花集の名は古今の序に夫和歌者託其根於心地發其花於詞林者也此語意を用ひて詞花の字をもとめて名付けられしにや

明治廿七年六月六日群書一説より抜写す 貞正

前書は廃藩の砌井伊彦根の間より御配慮の品にして貴重なり」

前号の訂正

2022年をへてもゆてふふしの山よりもあはれ思ひはわすれそまされる

甲南女子大学文学部日本語日本文化学科教授
よねだ あけみ

Introduction of *the Shikawakashū* Owned
by Konan Women's University Library and its Reprint (Vol.II)

YONEDA Akemi

Key Words: the *Shikawakashū*, Owned by Konan Women's University Library